

各務原の中世遺跡

— 蘇原東山遺跡群の祭祀信仰遺跡 —

編集 各務原市埋蔵文化財調査センター

TEL058-383-1123

発行 各務原市教育委員会

平成25年3月29日

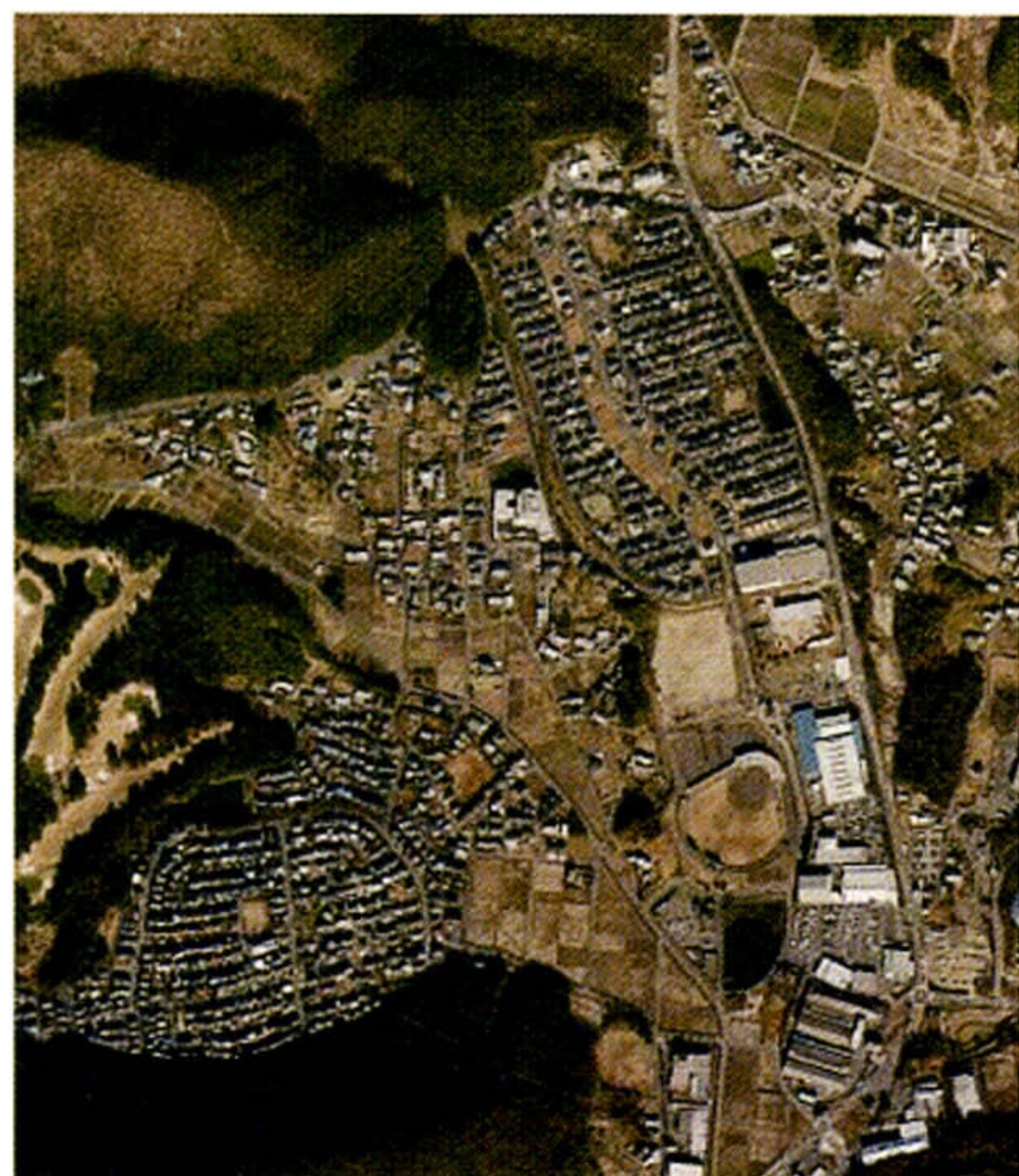
各務原市北部の東山地区は、蘇原持田町と須衛町の間にはひろがる丘陵につくられたまちです。かつてここには蘇原東山遺跡群という多くの遺跡や古墳がありました。縄文時代早期から前期にかけての集落遺跡にはじまり、弥生時代末期の墳丘墓に古墳時代後期や終末期の古墳群、そして平安時代の灰釉陶器窯のあとには中世鎌倉・室町時代の積石塚や古墳(6号墳・8号墳)の横穴式石室を利用した墓址などの多彩な遺跡が営まれました。発見された遺跡や遺構のなかで中世に営まれた積石塚や墓址は、一般的にはこれまであまり注目されてこなかった遺跡です。しかし、原始古代の人々とともに、中世の人々がなにを考え自らの暮らしと子孫の繁栄を願っていたのか、現在の私たちの暮らしがそうした歴史の延長上にあることを考えるとき、中世の遺跡は私たちに歴史の1コマを語ってくれます。



現在の各務原市東山地区の地図です。大規模な住宅地の南には工場・会社・市民球場などの施設があります。



明治12年の「美濃国各務原近傍実測図」にみられる東山丘陵。持田の北山から南に長く尾根が延びる様子が見えます。赤丸は南から1号積石塚、6号墳、8号墳の位置です。



上の地図とほぼ同じ範囲を撮影した東山地区の空中写真です。西に蘇原持田町、東に須衛町です。

1号積石塚:丘陵の尾根上に位置する現況直径約10mの塚で全体が拳大の角礫で築かれています。本来の形態は不明ですが、円形、あるいは方形であった可能性もあります。塚の内部からは角礫に混じって懸仏(かけぼとけ)という中世の信仰遺物が出土しました。懸仏は神仏習合の考え方から生まれたもので、平安時代に神社に祭られていた鏡に仏の姿を描いたことに始まります。鎌倉時代には立体的な仏像を取り付けるようになり、やがて天蓋(てんがい)や花瓶(けびょう)などの装飾が施されるようになりました。懸仏を吊り下げるための金具も最初は孔(あな)だけであったものが花葉(かしょう)形の鑲座(かんざ)となり、室町時代には獅噛座(しがみざ)となりました。

懸仏は意識的に破砕された状態で出土しましたので、何らかの祭祀の対象としてこの塚に埋納されたと考えられます。また、塚の積石をすべてはずしたところ、中心部の地山直上から1285年に中国で初鋳された「至元通寶」という貨幣が1枚出土しました。これは塚を造る際に地鎮祭のような祀りを行ったのではないかと考えられます。

かつて、持田と須衛を行き来する尾根道であり、村と村との境界でもあったこの地で、いったいどのような祭祀が行われていたのでしょうか。道中の安全や厄災の侵入を防ぐ意味があったのでしょうか。あるいは修験者などの修行場や祭場だったのでしょうか。



8号墳中世墓山茶碗

6号墳・8号墳:古墳時代の最終末期である7世紀後葉から8世紀初頭に築かれた方墳です。一辺が9~10mという小型の古墳ですが、この時期にはすでに大型の古墳は造られなくなっており、しかも、通常の円墳ではなく、南側正面を2段に築造した方墳であることから、ここに葬られた人物は地域の有力者であるとともに、新たに出現した郡司など律令官人層に属する人たちだったのかもしれない。



1号積石塚発掘前の全景(西から)



1号積石塚断ち割り後の全景(北から)全体が丘陵を形成するチャートの角礫で盛り上げられていることが分かります。



1号積石塚出土
懸仏獅噛座



1号積石塚断ち割り作業風景(北から)



1号積石塚灰釉水注出土状況



1号積石塚懸仏(阿弥陀如来像(左)・大日如来像(右))出土状況



1号積石塚出土懸仏銅板



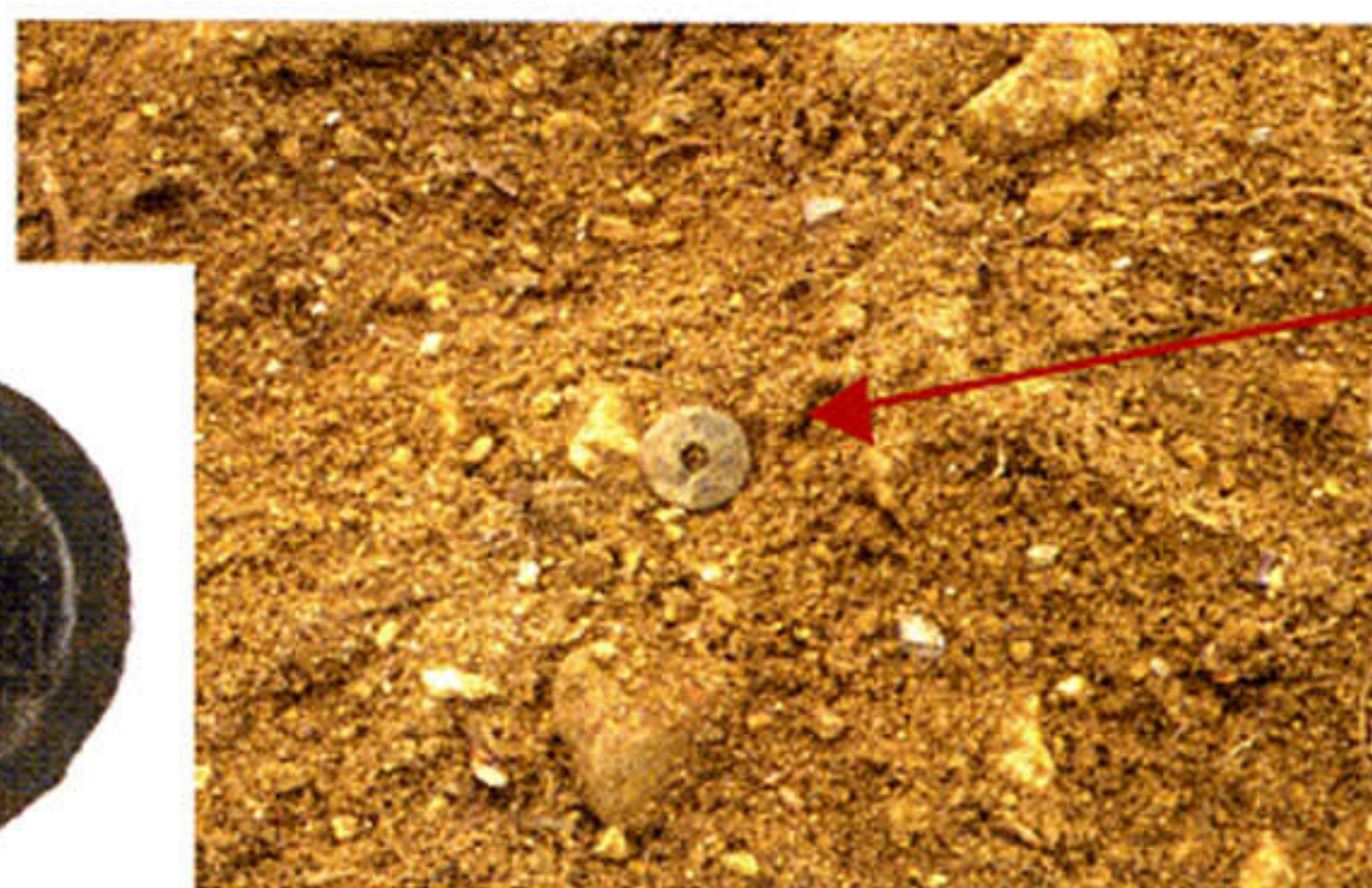
1号積石塚懸仏天蓋出土状況



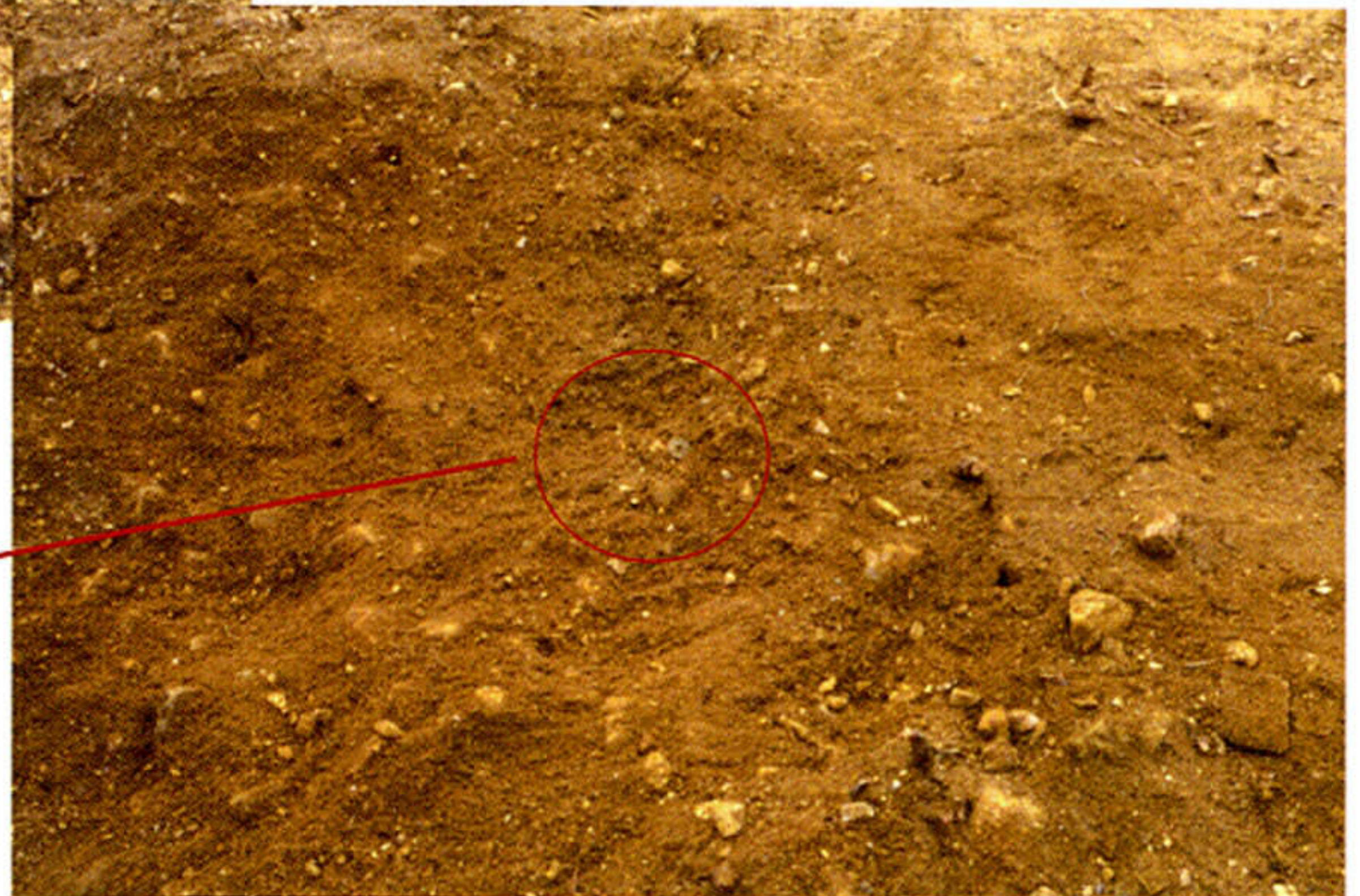
1号積石塚出土懸仏銅板



「至元通寶」
(中国/1285年初鑄)

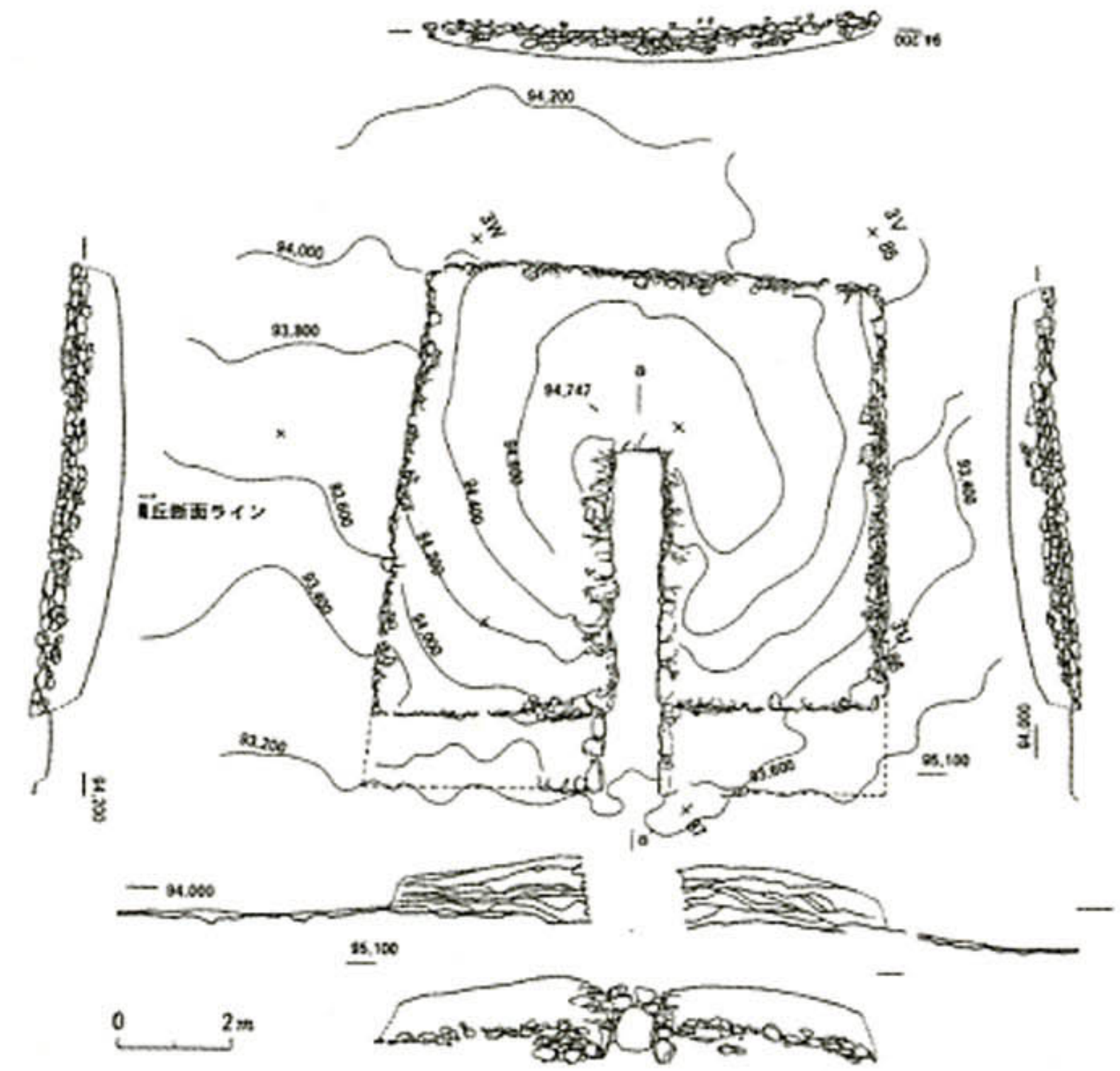


1号積石塚銭貨「至元通寶」出土状況(地山直上から出土)

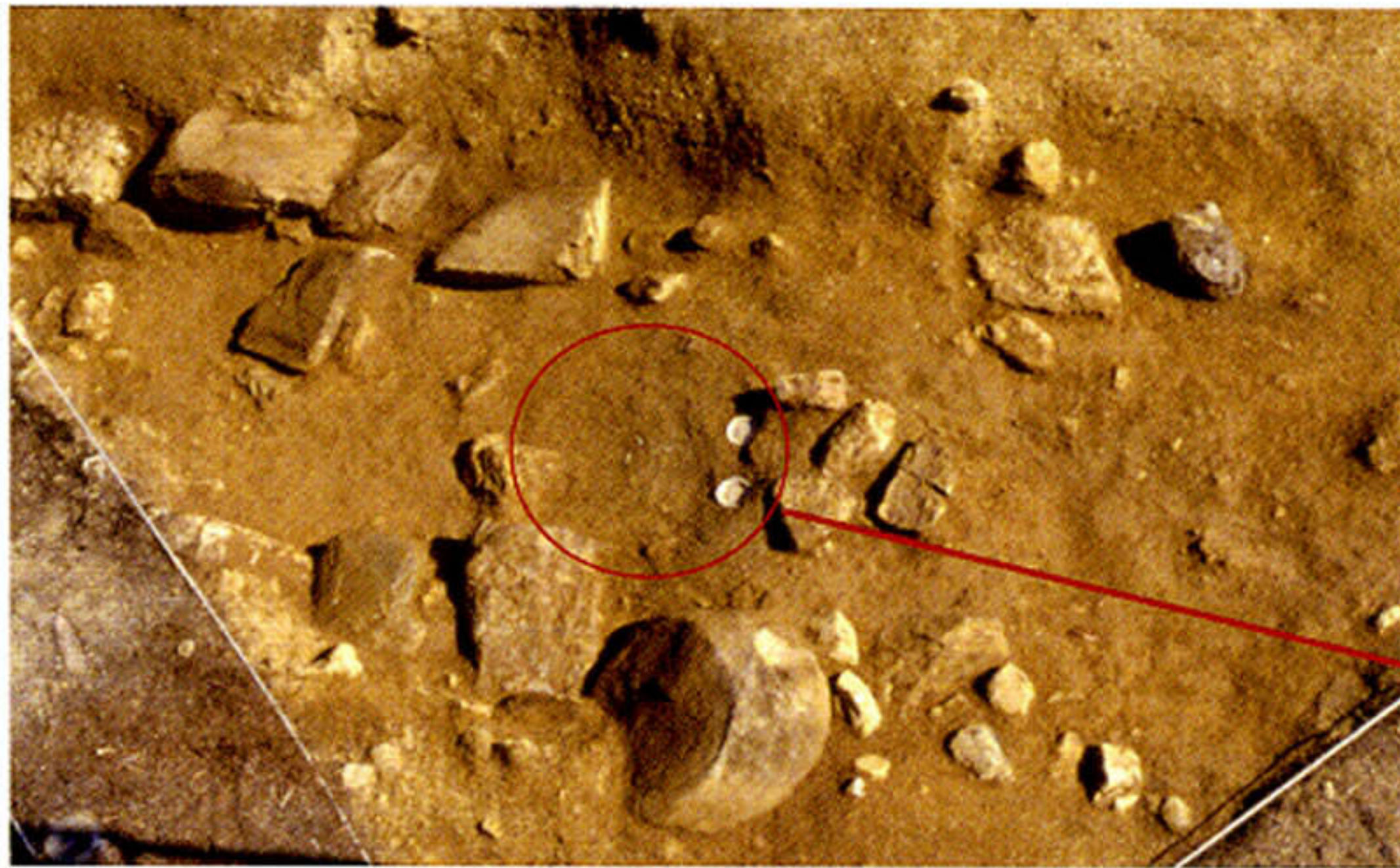




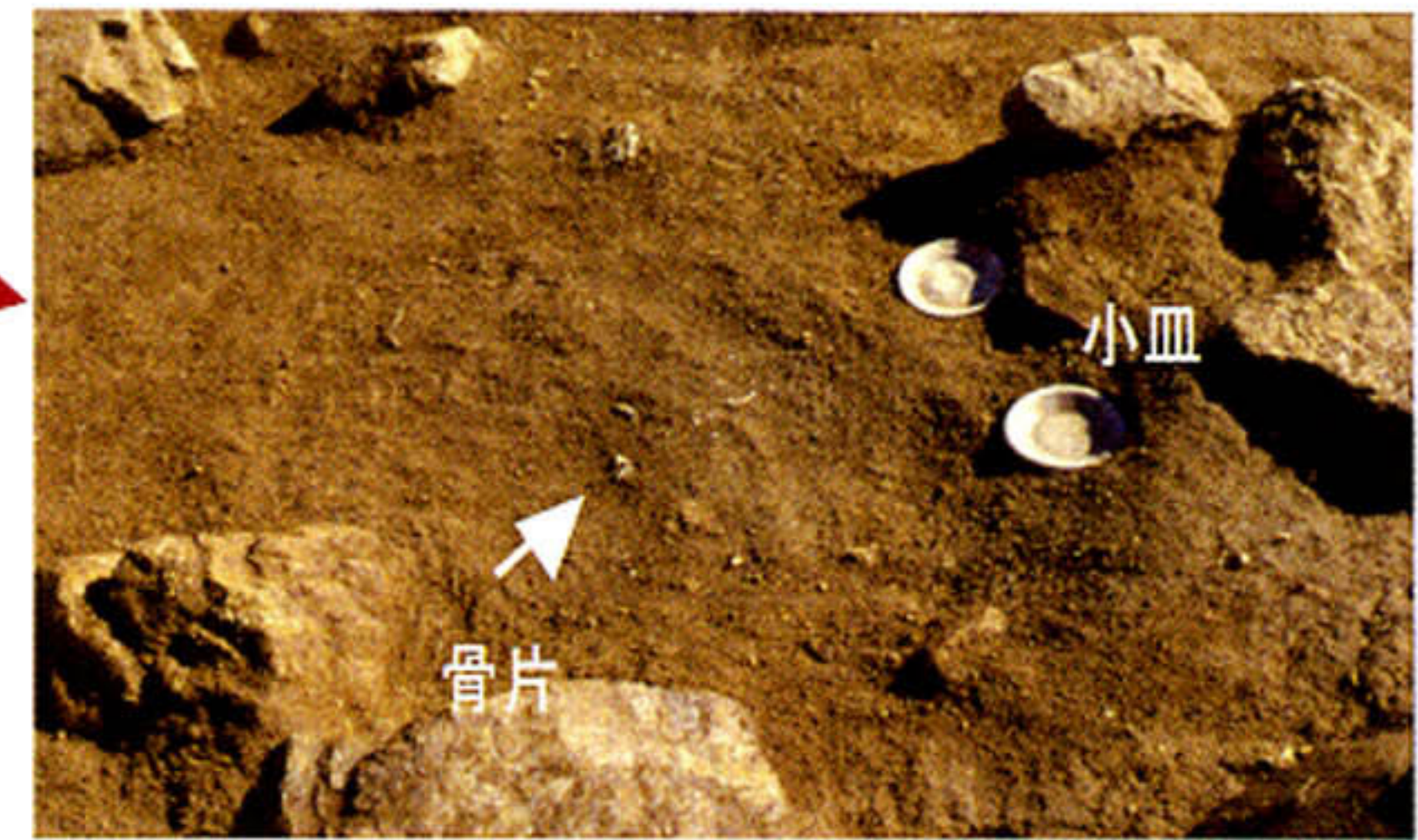
6号墳発掘前全景(南西より)現状では横穴式石室の天井石ははずされ、墳丘もかなり低くなっていました。この段階では古墳のかたちは円形と考えていました。



6号墳の測量図です。6号墳は7世紀後葉から8世紀初頭の一边が8~9mの方墳で、墳丘の南側正面が2段に造られていました。この時期はすでに古墳時代の最終末期で、各務原でも蘇原地区に5か所の古代寺院が創建されていました。6号墳は形態が通常の円墳ではなことから、郡司や官人となった地元の有力者が葬られたと考えられます。



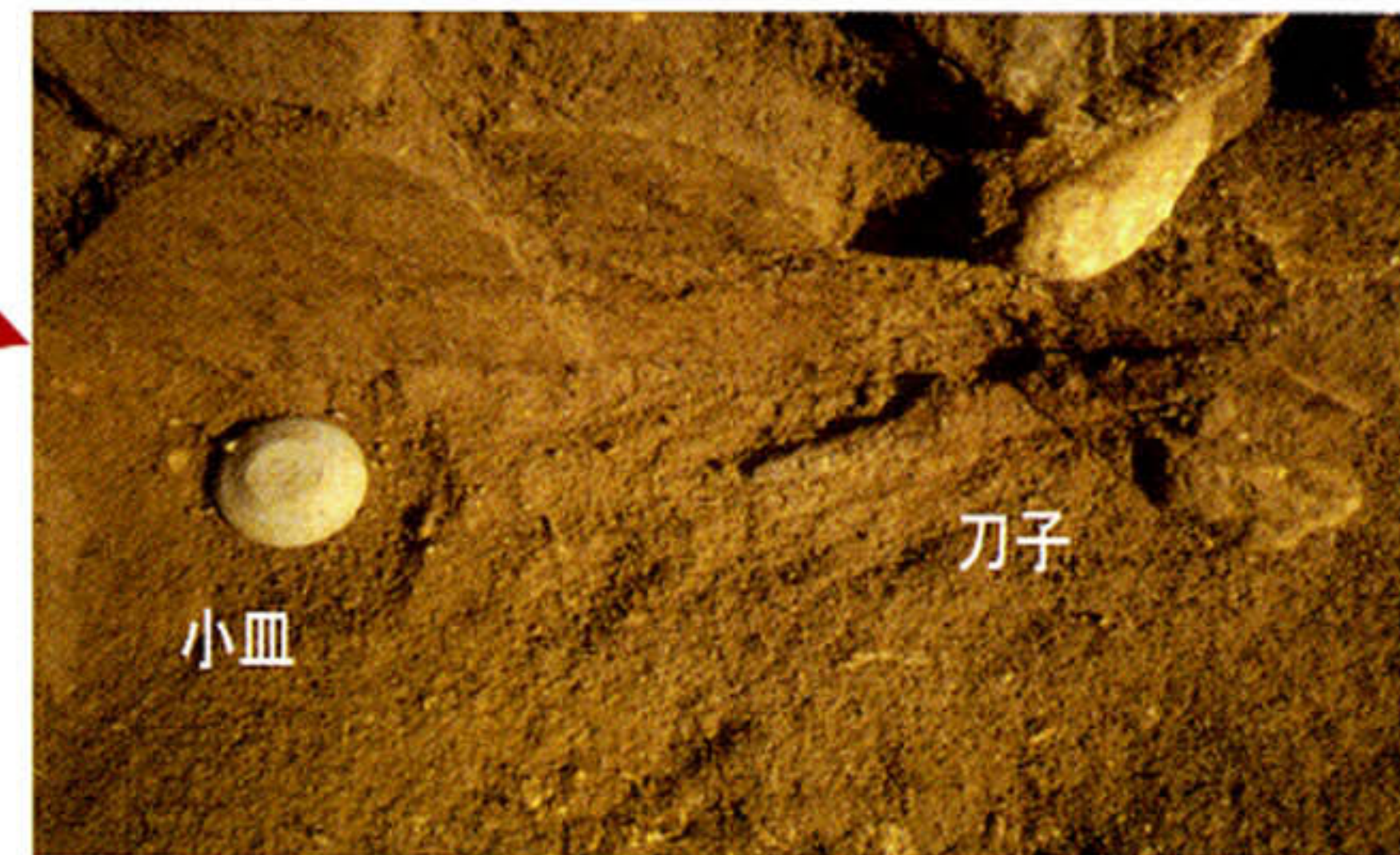
古墳の主体部である横穴式石室を掘り下げたところ、羨道部分の上面から鎌倉末~室町初期の小皿が出土しました。また、そのすぐ北側から人骨と思われる骨片も検出されました。



横穴式石室から後世の土器や陶器、その他の遺物が出土した場合、流れ込み遺物とされて調査検討の対象外とされることが少なくありませんでした。



さらに横穴式石室の奥壁際から中世山茶碗の小皿とともに小型の刀である刀子(現在のナイフ)が出土しました。時代は山茶碗とともに刀子の形態が古墳時代のものではないため、やはり鎌倉末~室町初期と考えられます。



刀子はもしかすると遺体の御守刀だったのかもしれませんが。



横穴式石室の掘り下げ風景です。6号墳は終末期の古墳ですので、石室の規模も一人がやつの状態です。横穴式石室の本来の役割である多人数埋葬を想定しない、単独埋葬であったと考えられます。



6号墳の全景写真です。古墳が中世には墓地としても利用されたことを証明する遺跡です。



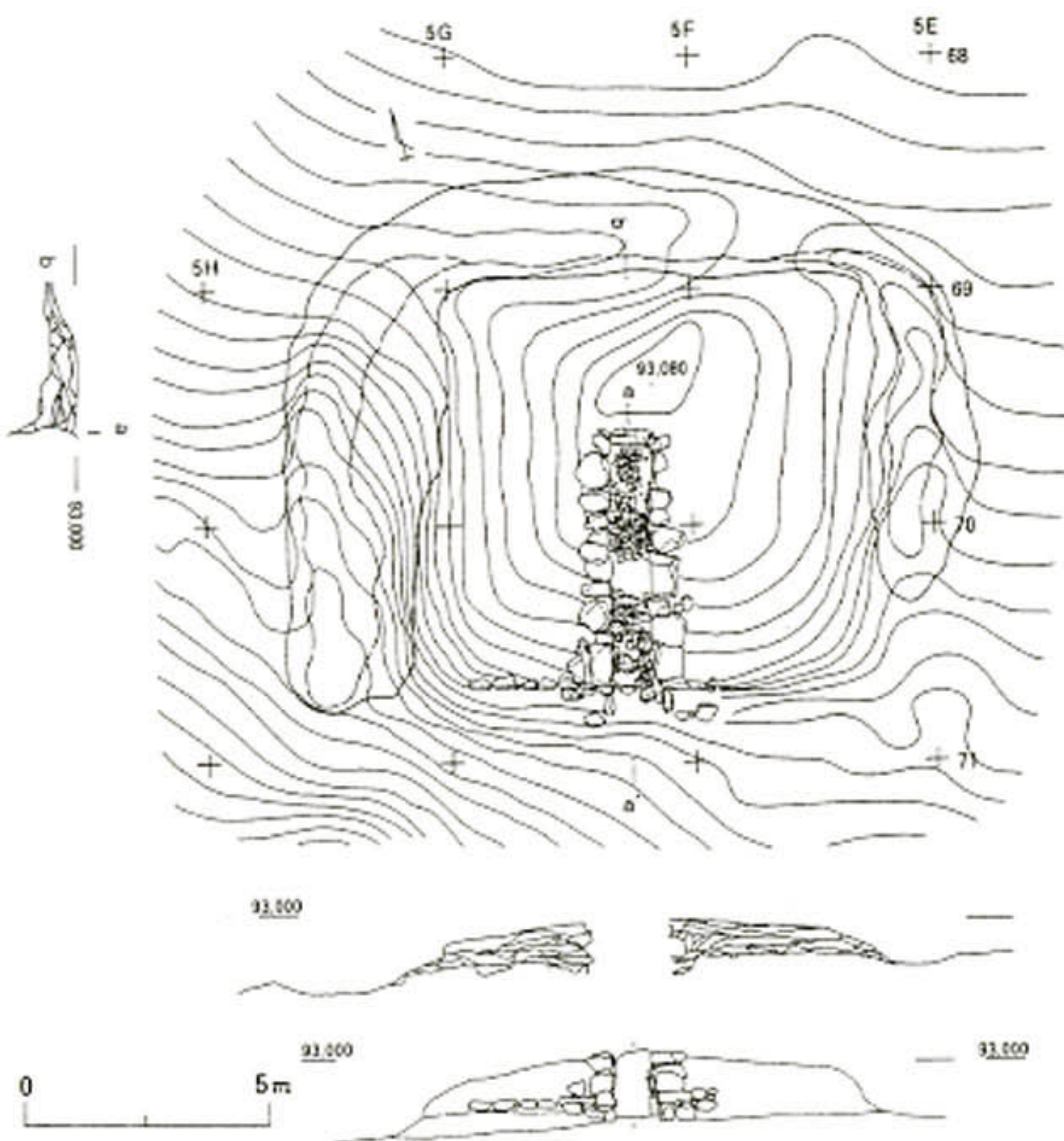
8号墳発掘前全景(南より)横穴式石室の天井石が一部に残っていましたが、墳丘は崩れて低くなっていました。この段階では古墳のかたちは円形か方形か区別はつきません。



8号墳発掘中の全景写真(南より)墳丘の南側正面にのみ葺石(外護列石)が見られます。6号墳と同じく2段に築かれています。他の側面には葺石はありません。



横穴式石室の入口である羨道部から遺体を安置する玄室を見たところです。玄室部分のみ床に礫が敷かれています。



8号墳の測量図です。一辺が9.5mの方墳で、墳丘の南側正面のみ2段の葺石があります。6号墳と同じく郡司や官人となった地元の有力者が葬られたと考えられます。



8号墳発掘後の清掃風景(北より)中央部に横穴式石室があり、周囲の人たちの身長から古墳の規模がわかります。



8号墳発掘中の全景写真(北より)墳丘を背後から見たところです。方形の墳丘のかたちがよくわかります。葺石がなくコの字状に周溝がめぐることがよく分かります。



横穴式石室の入り口部分の写真です。この部分のみ葺石が2段に築かれていることが分かります。



横穴式石室奥壁近くから中世山茶碗が出土しました。



横穴式石室手前の羨道部から中世山茶碗(赤丸内)と骨片(矢印)が出土しました。